都市社会学（都市研究）理論における インターセクショナリティの位置づけをめぐって

日本学術振興会　特別研究員PD
林　凌（assyupokira@gmail.com）

目次

- インターセクショナリティとはなにか？
- インターセクショナリティと都市理論
- インターセクショナリティを捉え返す
- 結語

都市研究におけるインターセクショナリティ概念の普及

- 近年の英語圏の都市研究におけるインターセクショナリティ概念の普及
  - 理論研究の文脈だけでなく、実証研究において本概念が分析枠組みの一つとして用いられることは珍しくなくなりつつある
  - 対象も多様であり、気候変動とエスニックマイノリティ（McArdle 2021）、動物とジェンダー（Hovorka 2012, 2015）、移民と開発（Bastia 2014）、空間分化におけるセクシュアリティと宗教の関係（Schroeder 2014）、公共空間における男女間の経験の差異（Biswas 2022）などが検討されている
  - DaVis(2008)は、社会科学においてインターセクショナリティが一種のバズワードとして機能していると論じているが、都市研究においてもそれはあてはまる
- 一方で、日本語圏において、本概念に基づいた研究は普及しているとは言い難い状況にある
- この状況を踏まえ本発表では、
  - ① 都市研究におけるインターセクショナリティ概念の広がりを、先行研究を踏まえ説明するとともに、
  - ② 日本における都市研究の再評価を通じて、本概念の力能を検討する

インターセクショナリティの定義

- 本概念の定義として、Collins＆Bilege（2020=2021: 16）は以下のような説明をしている

　インターセクショナリティとは、交差する権力関係が、様々な社会にまたがる社会的関係や個人の日常的経験にどのように影響を及ぼすのかについて検討する概念である。分析ツールとしてのインターセクショナリティは、とりわけ人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、ネイション、アビリティ、エスニシティ、そして年齢など数々のカテゴリーを、相互に関係し、形成しあっているものとして捉える

- わかったような、分からないような……
- なぜこのような概念が浮上してきたのか？

インターセクショナリティの概略史

- この点を、Nash(2008)は以下のように概説している
  - もともとIntersectionalityという概念は、法学者のCrenshawが作ったものであり、これは法学における主体の中立性・客観性を問題視するための概念であった
  - その際問題となったのは、オルタナティブな別の主体を異なる単一軸（人種・ジェンダー）に基づき想起することではなく、複数の属性の交差（intersection）を問題化することであった
  - つまり、現実の法制度における特定の人々の疎外は、単一の属性（ジェンダーor人種）に基づくものでも、その足し合わせでもなく、複数の属性の交差そのものに起因している、というのがCrenshawの申立であった
- 一方で、インターセクショナリティという考え方は、クレンショーの議論において始めて見出されたものではない（Hopkins 2017）
  - そもそも国家や都市空間内に周縁化された人々の運動において、この問題は明確に言語化されないとしても、多くの場合共有されていた
  - クレンショーの議論は、「黒人フェミニストが長年提唱し、労働者階級やレズビアンのフェミニストが推進してきた理論化の方法に名前をつけた」（Phoenix 2006: 21）ものとして捉えられねばならない

都市研究においてインターセクショナリティが普及したのはなぜか

- こうした概略史より、都市研究において本概念が受容され得た理由は一定程度理解可能
  - そもそも都市研究においては、実証的なフィールドワークを通じ、現象の複雑性を記述することが一般的
  - そのため、都市研究者は単一の評価軸に回収出来ない現象に遭遇することが多い。錯綜的な人々の諸経験を記述する上で、本概念はその後ろ盾として機能しうる
- たとえば先述したSchroeder(2014)において理論的に批判の対象となっているのは、ゲイ・ディストリクトの形成を、創造都市的なジェントリフィケーションと直結して結びつける、先行研究の見方
  - この研究は基本的にオハイオ州トレドにおける、セクシュアルマイノリティとキリスト教団の交流による、ゲイ・ディストリクトの形成過程を歴史調査を通じて明らかにしたもの
  - ここでは、一見リベラルな都市空間の形成（≒ジェントリフィケーション）と直結しているように思えるLGBTコミュニティの形成が、決してそのように単純ではなく、伝統的なアメリカにおける都市コミュニティとの相互作用の中で生み出されたものであることが強調されている
  - インターセクショナリティという概念を介することによって、この研究は単なる歴史記述ではなく、ジェントリフィケーションに関する先行研究との接続性を持つことができている

インターセクショナリティと都市研究をめぐる理論的「転回」との関係①

- このような研究は、一見すると古典的な都市研究のエスノグラフィ的手法に則っているように思える
  - しかし、重要なのは、これらの研究が基本的にジェンダーや人種に関する社会理論に対する反駁を前提として、経験的知見を持ってきているということ（＝「ベタ」な記述を目的としていない）
  - つまり、そこでは相互に関係し、形成しあっているという言明が、批判的な意味を持つものとして捉えられている
- ここで重要なのは、こうした批判の図式は1990年代以降の都市研究において繰り返されてきた「転回」の典型的パターンだということ
  - たとえば、こうした文脈におけるインターセクショナリティ概念の応用は、明確に2000年代の「関係論的展開（Relational turn）」の考えを受け継いでいる（詳しくは林 2021を参照）
  - 「すべてが繋がっている」という言明は、それだけでは意味を持ちえない
    - これが有意味となるのは、社会を記述する際の判断基準が過剰に縮減されている場合のみである
  - つまり、この文脈における本概念はある種の対抗概念であり、単独で理論的に意味を持つものではない

インターセクショナリティと都市研究をめぐる理論的「転回」との関係②

- たとえば、先述したHopkins, Schroederらの議論において重要視されているValentine(2007)においては、 Harvey （1993）の議論を批判的に参照することで、インターセクショナリティに着目する意義が打ち出されている
  - ここでHarveyは、アイディンティティに基づく差異の政治は、労働者文化の衰退を生み出し、連帯を不可能にすると論じている
  - 一方で、 Valentineはその批判は分極した現代社会を無視した本末転倒的なものだと論じ、むしろそのような階級に回収されない批判の可能性を都市研究は追求するために、インターセクショナリティに着目するべきだと論じている
  - そして、そうした検討は、近年の（マイノリティに着目した）都市研究、特にフェミニズム地理学が、ポスト構造主義に基づく「転回」によって、過度に思弁的になった、という批判によって生み出されている
- つまり、ここでは①マルクス主義的な都市研究②思弁的な都市研究双方に対する批判として、都市空間の中で繰り広げられる人々の実践を、インターセクショナリティという概念を介し、記述するという道が選び取られている
  - こうした学説史を捉えないと、インターセクショナリティ概念の都市研究における効用は見えにくいといえる

インターセクショナリティと都市研究をめぐる理論的「転回」との関係③

- また、そもそもこの英語圏の都市研究における「インターセクショナリティ」概念の浮上は、北米における社会問題の有り様と強く関連していることは留意しなければならない
  - たとえば、Kernの*Feminist City*（2020＝2023: 221）においては、インターセクショナリティ概念がしばしば強調されているが、その理由は「ジェンダー」と「人種」間の構造的問題が解決し難いことにある
  - 例：カーセラル・フェミニズムによる、白人女性の安心感の獲得が、人種的マイノリティの権利を侵害する、など
  - つまり、現実の社会問題を考えるときに、「ジェンダー」や「人種」、あるいは「階級」という問題に回収することができないので、本概念が重要視されている
- では、こうした学説史や社会的背景を直接共有していない日本の都市研究において、わざわざインターセクショナリティをめぐる議論をそもそも取り入れる必要があるのだろうか？
  - こうした問が出てきてもおかしくはないだろう

日本の都市研究におけるインターセクショナリティ

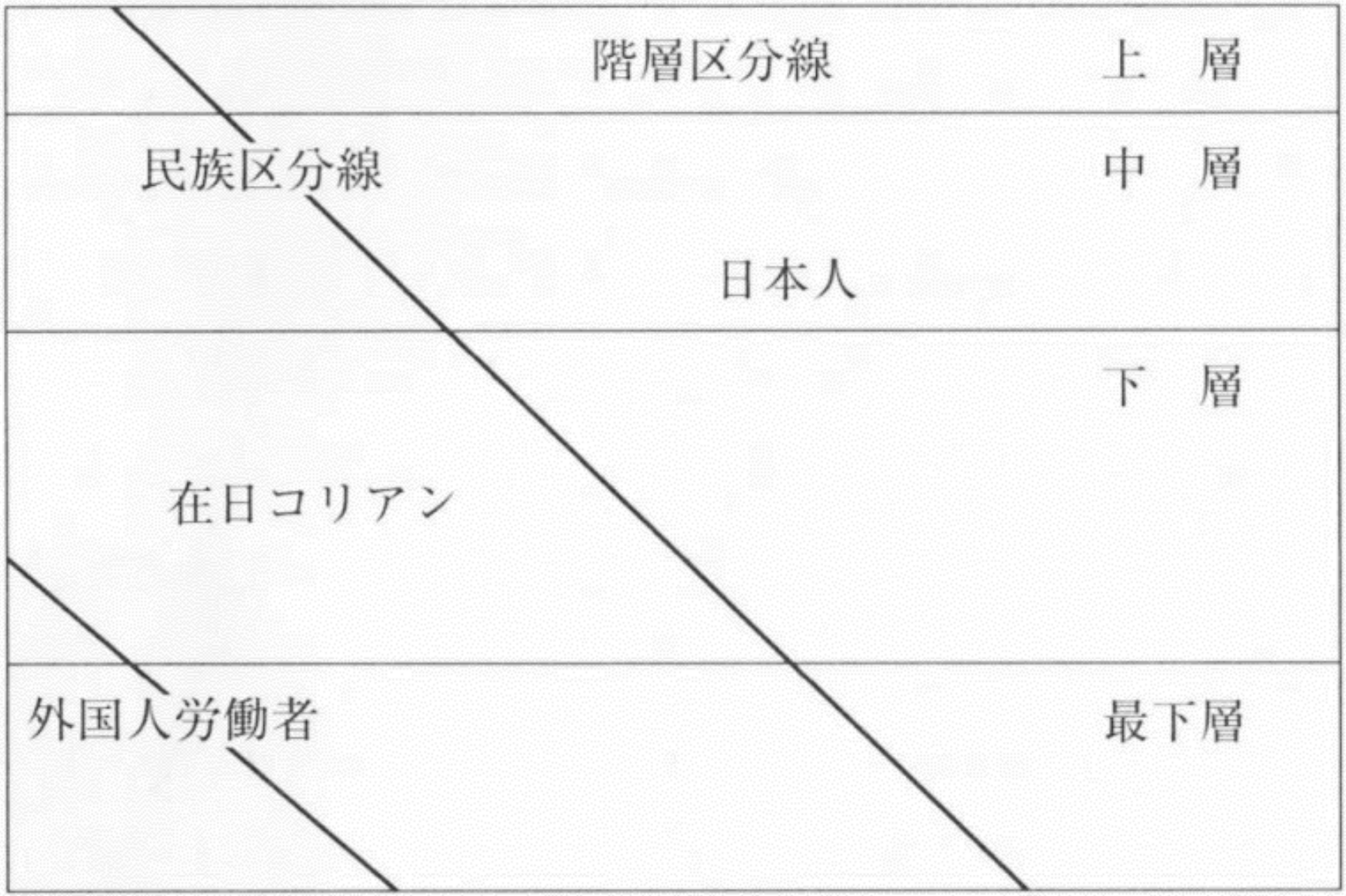
- この点を考える上で、ここで取り上げたいのは、青木（2000）の「都市下層」をめぐる議論である
  - 本書においては、（経済的時代背景もあり）ジェンダーに関する問題は殆ど出てこない。そのため、皆さんの中には、なぜその本を？と思う人がいるかも知れない
  - しかし、本書を貫く問題関心は、本質的に様々な社会的属性の「交差」をめぐる問題にある
- また、十分に構造化されている訳では無いが、この青木の問題関心は、明確に当時の都市研究の理論的潮流と結びついている
  - 青木が本書において根底においているのは、FriedmannやSassenらの「世界都市仮説」。しかし、ここで青木は、単に「世界都市」に外国人労働者が流入する、ということを論じているわけではない
  - むしろそこで問題化されているのは、こうした動向による「都市下層」の「再編」と、その内容を見極めることにある

「民族集団」内の錯綜性

- 青木は同書において、1980年代以降の日本において、外国人労働者が流入し、それが日本における伝統的な「臨時・日雇労働市場」へと参入していることを述べている（青木 2000: 118-119）
- この説明は、日本における社会階層における下層（「都市下層」）に、外国人労働者が組み入れられていく過程を、労働市場という側面から把握する試みであると言える
  - 彼はここに、在日コリアンの事例を組み合わせ、大阪における「都市下層」の様相を明らかにしようとしている（青木 2000: 123-126）
  - しかし重要なのは、ここで彼は在日コリアンや外国人労働者を一様な「都市下層」として捉えているわけではない、ということ（次頁参照）

- 〔日本社会において階層論的に見た場合〕まず支配的な集団は、日本人である。ただし「日本人」の民族的境界は、かならずしも自明ではない……次に、旧移民として定住する在日コリアンが位置づく……最後に、階層構造の底辺に新来の外国人労働者が位置づく……在日コリアンの階層的地位は、内部で分化する。彼・彼女らのあいだに、少数とはいえ上層集団が、次いで中層集団が形成される。もっとも多いのは、下層の人びとである……外国人労働者もまた、労働熟練度・滞日期間・ネットワークなどの要因に基づいて、民族集団相互に、また個人レベルで階層的に分化する。ただしその階層化は複雑で流動的である（青木 2000: 127）

図 5–4　日本社会の民族関係



青木（2000: 126）

〈人種〉と〈階級〉の関係

- つまり、ここで青木は、都市空間における社会階層の分化を考える上で、「階級」や「民族集団」だけでは語ることができないこと、そこには資本と民族集団に依拠した複雑な社会関係が存在していることを指摘している
  - 「民族集団」と「階級」の関係は、研究者の手によって一元論的に処理することができない
  - だからこそ、「都市下層」に位置する人々がどのような経験をしているかを調査することなしに、その状況を理解することはできない（これが青木による「生活史」の重要性を示す論拠となる）
- この観点から、青木は「都市下層」研究の一環としての、アメリカで、Wilsonらによって展開された「アンダークラス」をめぐる議論を以下のように整理している
  - 「しかしここ〔Wilsonらの議論を踏まえ、アンダークラスという問題を検討する上〕で本当に必要であったのは、アンダークラスの形成における〈人種〉（および福祉政策）と〈階級〉（および経済政策）の**関係**を正面に見据え、それらが交錯する諸相を明らかにし、もって問題の二面性を統一的に把握することであった。そのためには、〈人種〉と〈階級〉の関係を説明するための新たな枠組みが構成されなければならない（青木 2000: 260, 強調は原著で傍点）」
- 報告者は、こうした青木の記述を「インターセクショナリティ」という概念を通じて捉え返しても良いのではないか、と考えている
  - また、そこで多く論じられていない問題、すなわちジェンダー格差（あるいは複数のジェンダーの「不在」）の構造的問題を、この延長線上に捉えてもよいだろう
  - インターセクショナリティ概念の効用は、思うにこのような複数の研究間の連接性を明示化することに資する点にあるのではないだろうか

インターセクショナリティ概念の有用性

- インターセクショナリティは、少なくとも都市研究の文脈においては、新規な分析手法をもたらしてくれる、画期的新概念ではない
  - むしろそれは、私たちの生きる社会の有り様について、研究者が多くの場合考えていることを明示的に言語化するための概念であり、新たな研究の連関を作り出すための概念である
- よって本概念を用いることの効用は、人びとが受けた差別・暴力の経験を、「シングルイシュー」化せずに捉えることが可能になるという点にある（米山 2016: 431）
  - 都市、あるいは地域における社会的不平等を、諸属性の絡み合いという観点から検討する上で、本概念は一種の共通語として機能する
  - カテゴリーは、一回形成されるや否や私たちの想像力を一様なものへと固定させる。本概念は、その働きを一部食い止める作用がある

インターセクショナリティ概念における留意点

- 一方で本概念は不可避的にアイディンティティ政治と結びつく点に注意が必要
  - つまり、普遍的な私たちの有り様を論じるための一般理論なのか、あるいは特定の周縁化された人々の有り様を論じるための理論なのか？
- この点について、先行研究においても見解は必ずしも統一化されていない
  - Valentineは一般理論を志向し、Hopkinsはその傾向に批判的である。本概念に依拠する人々の中でも、本概念の適用範囲をどこまで広げるかはまちまち
- よってリベラリズム的普遍主義と、本概念のかみ合わせがどこまで良いか（悪いか）は検討の余地がある
  - この点は、近年のアイディンティティ政治批判の風潮も含めるとなお重要だろう。特に私のような人間がそもそも本概念の説明をして良いのか、という部分とも関わる
- ただし、少なくとも特定の人々のマイノリティ性が、いかに都市構造の中に埋め込まれているのかを検討する上で、本概念に依拠することに一定の意義があることは疑いないように思われる

参考文献

- 青木秀男, 2000,『現代日本の都市下層』明石書店.
- Bastia, T., 2014, Intersectionality, migration and development. *Progress in Development Studies* 14(3): 237–248.
- Biswas, R ,2022, Reclaiming the urban: an intersectional analysis of women's and men's experiences of Kolkata's public spaces, *Gender, Place & Culture*, 29:4, 589-593.
- Collins, P, H. and Blige, S., 2020, *Intersectionality, second edition*, Polity Press.（小原理乃訳『インターセクショナリティ』人文書院.）
- Davis K ,2008, Intersectionality as buzzword: A sociology of science perspective on what makes a feminist theory useful. *Feminist Theory* 9(1): 67–85.
- Harvey, D. 1993. "Class relations, social justice and the politics of difference". In *Place and the politics of identity*, Edited by: Pile, S. and Keith, M. 41–66. London: Routledge. In, ed
- 林凌, 2021,「出来事としての都市を考えるために——都市研究における『関係的思考』の理論的系譜とその問題点」平田周・仙波希望編『惑星都市理論』以文社, pp.277-305.
- Hopkins, P. ,2019, Social geography I: Intersectionality. *Progress in Human Geography*, *43*(5), 937–947.
- Hovorka AJ ,2012, Women/chickens vs. men/cattle: Insights on gender-species intersectionality. *Geoforum* 43: 875–884.
- Hovorka A ,2015, Feminism and animals: Exploring interspecies relations through intersectionality, performativity and standpoint. *Gender, Place and Culture* 22(1): 1–19.
- Kern, L., 2020, *Feminist City: Claiming Space in a Man-made World*, Verso.（東辻賢治郎訳, 2023, 『フェミニスト・シティ』晶文社.）
- McArdle, R., 2021, Intersectional climate urbanism: Towards the inclusion of marginalised voices, *Geoforum* 126, 302-305.
- Nash JC ,2008, Re-thinking intersectionality. *Feminist Review* 89: 1–15.
- Phoenix A ,2006, Interrogating intersectionality: Productive ways of theorising multiple positioning. *Kvinder, Kon and Frorskning* 2–3: 21–30.
- Schroeder CG., 2014, (Un)holy Toledo: Intersectionality, interdependence, and neighbourhood (trans)formation in Toledo, Ohio. *Annals of the Association of American Geographers* 104(1): 166–181.
- Valentine G., 2007, Theorizing and researching intersectionality: A challenge for feminist geography. *The Professional Geographer* 59(1): 10–21.
- 米山リサ, 2016,「広島で『暴力、その後』を問う意味について——『記憶の女性化』のリトレースから」高雄きくえ編『被爆70年ジェンダー・フォーラムin広島「全記録」：ヒロシマという視座の可能性をひらく』ひろしま女性学研究所.